

大和座
通信

YAMATOZA

日々新面目

其の十六

安東伸元

鶴企・鶴首・鶴望していた書物「狂言画写の世界」がいよいよ印刷の段階に入った。八月の公演日、すなわちこの大和座通信七十九号の発行日には、皆さんの目に供する事が出来るはずである。冒頭の修辞の言葉は、恩師山崎方靖先生が投与して下さったお便りの文中にあったのをそのまま拝借したものである。先生は数多くの出版物を手がけてこられ、和泉書院からも近年数冊の著作を刊行されている。書籍作りの苦労を重々ご承知のはずだから、文字通り鶴の首のように期待の心をのばして待ちわびる私の気持ちを押し量って記して下さった言葉である。妻がこの言葉を眼にして、眼から鱗が一つ落ちるような感銘を受けたようである。鶴首以外は辞書を引いても簡単に説明の得られない言葉であるが、状況を見

事に表現して、尚かつ読む者に何らかの感慨を与えるこのような言葉つかいのセンスに感銘を覚えたのである。中野眞作先生が「狂言画写」の巻子一本を入手されたのは五年前である。その頃から夫人の慎子先生による「狂言装束の構成研究」が始まり、この資料を基にした本作りの企画が私に伝えられ執筆を誘われたのが二年前である。そして、執筆を始めて一年余りの今夏いよいよ一冊の書物が姿を現すわけである。雪原に降り立ち天空へ真つ直ぐに首をのばす鶴の姿に似た長い待機の年月であった。世の中には速射砲のように出版を重ね、その何れもが驚く程の発行部数を誇る傑人作家がおられる。売れるであろうツボをおさえ、効率よく作文し、しかる後に衆目を引き寄せる題名と宣伝文句をつけ、巨費を投じて広告すれば大体予想の結果が手に入る。どうやら出版社には、そのような事を企て助けるベストセラー作りに練達した編集人がおられるようである。書籍というものは、人が考え言葉を綴る思い入れの所産である。その思い入れが、すなわちその書物の歴史（誕生のストーリー）である。私は思い入れの感じられる書物が好きである。採算と効率を主体にコンピューターで編纂されたとは思えない大量の出版物が書店に山積みされている。生来の天の邪鬼心から申すわけではありませんが、どうも私に

はそれらの書物の背後に著者や発行人が本作りの労苦に呻吟する姿や、深い思い入れの心が感じられない。殊に麗々しく体裁よく装丁された出版物などに限って不思議なほどその香りが嗅ぎ取れないのである。出版について私は極めて不明な門外漢であるが、和泉書院の社長、廣橋研三氏には正にその香りがあり、直感的に信頼出来る良き出版界の人と思った。書籍に並々ならぬ愛着と思い入れをお持ちであると察した。数台の携帯電話を駆使し、勇ましく部下に号令を発し、今をときめく有名人たちとの会食打ち合わせに東奔西走する編集長などという人物とは正反対の清鑑を感じさせる人であった。刊行元にこの和泉書院を得たことは幸運であったと心底感謝したいと思う。関西の能楽界にあっても、論評と研究の分野において中心的な地位を占められる関西大学教授、関屋俊彦先生の序文寄稿は、斯界において何らの後ろ盾を持たぬ私や大和座狂言事務所にとって、この上なくありがたい珠玉のご筆援となった。「狂言画写の世界」の題字は、このほど日展委嘱審査員の選出を受けられた土井汲泉先生の揮毫を拝した。土井先生は羽衣短期大学において研究室を共にさせて頂いた同僚教授である。書道と狂言芸道を折り合わせた、日々の愉快な談論の延長として先生がこの本にお寄せ下さった思い入れが見事に感知出来

る題字である。さて、これらの事全ての仕掛け人は、旧鴻山文庫「狂言書写」一巻を所蔵される茶梅庵亭主、中野眞作先生である。先生は今般完成の目途を見るに及んで、私を本作りの労役に引き込んだ事を謝す言葉をおかけ下さったが、私はむしろこの仕掛けに絡め取られた事を心から感謝したいと思う。近年出版物の一つの傾向として、読みやすく理解しやすい平易な記述をという編集方針があつて、時折私もそのような要請を受けることがある。要するに読者の便宜を図る配慮が働いているのである。当用漢字、現代仮名遣い、現代用語辞典に添った文章作りが好ましいという社会通念である。ワードプロセッサで作文していると字句や文章の訂正を促す表示が現れる。明らかかな誤りの指摘は親切でありがたい事であるが、そうでない場合は、あたかもあなたの作文は現代的ではないですよと検閲を受けているようで不快を覚える。若い編集担当者の中には校正に当たって、何のためらいもなくそのような観点による訂正を朱書きしてくれる人がいて、苦笑させられることがある。事務的な書式は別にして、思想の表明に他ならない文章に画一的な統制は本来余計である。かつて或る行政機関に領収書を提出するに際して、和紙に墨書したものを用意したところ担当者はそれを奇異に感じた様子で、通常の書式でと注文を

受けた事がある。私は決して格好をつけるなどという思いではなく、頂戴した出演料のありがたさを素朴に和紙と墨に託しただけであるのにかかわらず、私の些細な感謝の思い入れが通じなかつたわけである。鶴企・鶴首・鶴望の言葉は想像を喚起し思考を引き出すものである。これが文章を読む楽しみである。これを普遍的でなく難解と切り捨てると、只今書店に山を成している大半の書がそうであるように、書き手の血脈を感じさせない毒にも薬にもならぬ文章の氾濫現象を産む。また画一を嫌う者の記述は、ただ恣意放縦に文語体とも口語体とも分からない文章を書きなぐつたにすぎず、それを個性の表現と自認しているものように思える。「激辛」「激安」「シャベリ場」「超」などという造語が次々に現れ紙面を飾る。これらの言葉に私はいじましさを感じている。その作語を現代の言語センスと容認する大衆がいるわけであるが、これは何とも軽くていじましい文化様相と言わねばならぬようである。昨日、親族の尾野順一翁から親書を拝受した。前号の「日々新面目」紙面に漂う空疎・無力・閉塞感がいつもと違う印象で気にかかるのご指摘であつた。私は現役で、しかも余人には代え難い居場所を持ち、大和座同人達の目を見張るような進境もあり、閉塞感よりも、むしろ「変革への義務感」の方が相

応しいというご意見を拝した。また文中に「公演の始まる前と終わった後、同人の方は皆さんロビーに出て、お客さんを迎え、見送っておられました。紋服で端正な姿勢、折り目正しい辞儀、にこやかな笑顔、それは誠に好ましく素晴らしいことでした。そこには何の見せかけも、肩肘の張つたところも感じられませんでした。舞台上で学んできた事をただ自然にふるまっているといふ、そのことが私には大変印象的でした。正に非日常と日常の境目が消えています」これはうれしいお褒めの言葉、これを糧に今夏を乗り切りたいと念じます。(七月三日)



安東 伸元(あんどつ のぶもと)

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受け、「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む「呪文」

もろきゆう

『宇治拾遺物語』の「山伏舟祈り返す事」には次のような話が載っている。

「これも今は昔、越前の国、甲楽城の渡りといふ所に、渡りせんとて、者ども集まりたる、山伏あり。けいたう坊といふ僧なりけり。熊野、御嶽はいふに及ばず、白山、伯耆の大山、出雲の鰐淵、大方修行し残したる所なかりけり。」という序文で始まるこの話は、けいたう坊という山伏が奇瑞をなしたという話を記録している。以下現代語に直してみると次の通りである。

山伏のけいたう坊が、甲楽城の渡し場で渡し舟にのろうとすると大勢の人が待っていた。人々はそれぞれ舟賃をだして乗ったが、このけいたう坊は横柄にも「渡せ」と渡し守に言うだけであつた。当然、渡し守はけいたう坊を乗せずに舟を出した。けいたう坊は「どうしてそんなひどいことをするのか」と言つたが、渡し守はそれを聞き入れもせず、漕ぎ出す。するとけいたう坊は歯ぎしりをして、珠数を揉みしごきだし、渡し守は振り返つて「ばかなことを」という顔をして、どんどん漕いで行った。そこでけいたう坊は舟を見やって、足を半分ほど砂に入れ、目を真っ赤にしてにらみつけ、

珠数をちぎればかりに揉みしごき、「返し返せ、召し返せ」と叫んだ。その上、珠数と袈裟を手に持ち「護法、召し返せ。召し返さなければ仏法とはお別れ申しあげよう。」と叫んで海に投げいれようとした。周りにいる人たちは真っ青になつて立ちすくんだ。そここうする内に、風も吹かないのに舟が岸へ寄つてきた。それを見て、「寄つてきた。寄つてきた。早く連れてきなさい。早く連れてきなさい。」という。舟は岸から一町ほどのところまで戻つて来た。その時、けいたう坊は「さあ、ひっくり返せひっくり返せ。」と叫んだ。そばに

物などの調伏する法力をさすこともあがるが、ここでは仏法を守護する護法神をさすものである。けいたう坊は護法に祈誓している者であり、三三つまり仏法僧を敬つている者のはずだ。その山伏が「もし舟をひっくり返さなければ仏法僧と別れを告げる」と脅しているところをみると、呪文と言つても仏法僧を呪う呪文のようにも思える。『宇治拾遺物語』作者は、山伏を乗せなかつた渡し守を責めるわけでもなく、また舟をひっくり返したけいたう坊を責めるわけでもない。最後に「世の末ではあるが三宝はあらたかにいらつしやる。」として三宝の存在を肯定するためにこの物語を書いたのだ。

もえない罪になりますよ。やめなさい。」といさめたが、耳にも入れず「早くひっくり返せ。」と叫び、渡し船に乗つていた二十人余りの人々は海へざぶんと投げ込まれた。けいたう坊は汗を押しぬぐい、「わからずやどもめ、我が法力をまだ知らぬか」と言つて立ち去つたという話である。

それでは、平安時代から室町時代にかけて、山伏の呪文とは如何なるものだったのだろうか。四国霊場四十八力所を遍路する者は真言密教なので般若心経を唱えることを常としている。山伏や修験道の者達は真言密教系統のものもあれば、天台密教のものもある。必ずしも般若心経でなければならぬというわけではないが、経文を祈祷文としている者も多くいたはずだ。葛川の相応出世の話が村山修一著『山伏の歴史』に載っているが、その中で相応十二年間の参籠中「不動明王法」「別尊儀軌護摩法」を授けられ、きびしい修行によつて不動明王そのものに化する法験を得たとある。ま

た、『人倫訓蒙図彙』には山伏の説明として、「修験道ともいふ。役小角是をはじめ（省略）孔雀明王の呪をとえ大行の人なるゆへに、役の行者といふなり。」とあることから「孔雀明王の呪」すなわち「孔雀經」の一種を唱えていたと推測される。数少ない例ながら、現実の山伏が唱えていた呪文は経文の一部だったと考えてよいだろう。

ところで、狂言に登場する山伏の呪文はあまりにもふざけている。「それ山伏といっぱ、山に起き伏すによつての山伏なり。」とこれまではよい。なぜならば洒落と後の時代に言うもの、これは山伏の由緒を掛詞を使って説明しているからだ。「兜巾といっぱ一尺ばかりの布きれを真っ黒に染め、むさとひだを折つての兜巾なり。珠数と言っぱ、いらたかの珠数ではのつて、むさとしたる草の実をつなぎ集め、珠数と名づく。この珠数にて一祈り祈るならば、などが奇得のなかるべき。」などと山伏が身につけている兜巾や珠数の説明を、しかもむさとした布きれやむさとした草の実であると説明しているのは何とも滑稽ではないか。そんなものが呪文であるはずはない。山伏が偉そうに呪文らしき似非（えせ）呪文を声高らかに唱えれば唱えるほど観客には滑稽に映り、笑いが起こるのだ。また狂言の山伏の呪文は最後に「ぼろんぼろ、ぼろんぼ

ろ」などという擬音語のような呪文を繰り返す。これは山伏が吹き鳴らす法螺貝の音を表しているという説や「一字金輪」という大日如来が最勝の三昧にはいつて説いた真言である b h r u m つまり「ぼろん」であるという説もある。それではあまりに真面目な呪文ではないか。狂言の山伏はまかり間違つても、真言密教の教えにのつとつた呪文など唱えてはならない。えせ山伏の正しい呪文など観客が聞いてもおもしろくも何ともないのだ。

さて、これを梵論（ボロ）と掛けていたと考えるのはいかがだろうか。梵論とは被髪・破衣で帯刀し、諸国を廻り歩く者たちを指す。虚無僧の前身とも言われている。『徒然草』百十五段に次のような話が載っている。ぼろぼろたちが宿河原に集まつて九品の念仏を唱えていたところ外からやつて来たぼろぼろが「いろをし」というぼろはいるかと尋ねてきた。「いろをし」は師匠の敵だといって果たし合いとなり、差し違えて二人とも死んだとある。「ぼろぼろといふもの、昔はなかりけるにや。近き世にぼろんじ・梵字・漢字などいひける者そのはじめなりけるとかや。世を捨てたるにて我執深く仏道を願うに似て鬪争をこととす。」と兼好法師が言つたように「ぼろ」は俗世の垢にまみれた人間の象徴であるのだ。もちろん山伏と梵論と同じというわけ

ではない。山伏の祈祷の呪文がいかにもいかげんな、偽物の呪文だということを示すのに最もふさわしい言葉が世捨て人を示す「ぼろぼろ」であつたほうがおもしろいではないかということだ。本来あつてはならない山伏の姿は我執深く、欲深く、弱い者に強く、強い者に弱いという最も俗っぽい姿である。あえてそれを言葉にすることで、狂言に登場する山伏の低俗さを表しているのではないかと思う。だから山伏の呪文も低俗さを醸し出すものであつたほうが、より一層おもしろく感じられるのだ。



山田 師久（やまだ もろひさ）

大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術プレーン。月例輪讀会々の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

今、落語ブームらしい・・・

森五六九（もりごろうく）

今、巷ではちょっとした「落語ブーム」

と言われている。ほとんど毎日のように新聞紙上で落語のことがとり上げられている。

「ブーム」で終わらず存続することを願うばかりだが、この「ブーム」という言葉、

実は個人的にあまり好きではない。それに正直言つて今「落語ブーム」の実感すら私にはほとんどない。ただ乗り遅れているだけの落ちこぼれと言われればそれまでだが、とにかく今回はその背景について感じるま

ま。まずは来年の五月十五日にオープン予定の落語専門の定席小屋「天満天神繁昌亭」の話題。只今大阪天満宮の境内に建設中。これまで大阪には漫才中心の劇場はあつても落語専門の定席小屋というものがなかった。私も通天閣の麓ジャンジャン町にあつた新花月や道頓堀浪花座にずいぶん出演させてもらったが、とても落ち着いて落語ができる環境ではなく、ついつい小咄漫談でお茶を濁すことの方が多かつた。特に新花月で酔っぱらいに絡まれながらの落語は相当堪えた。尤も、そうは言つてもそんな環境の中でもきちんとして聞かせる先輩方もおられたし、要は私にその腕もなければ自信もなかつただけのこと。何はともあ

れ落語専門の小屋ができるのは有り難いことだ。それも一年三百六十五日の開催を目指すわけだから、「どこへ行けば落語が聞けるのですか」と人に問われても、これからは堂々と「天満天神繁昌亭」と答えることができる。上方落語協会桂三枝会長の行取り図が郵送されてきた。私も寄席の見るのは舞台の奥行きが狭いということ。それもそのはず。この寄席の造りは東京の新宿末広亭をモデルにしている。何より落語を演るにそう奥行きは要らない。しかし、私は桂蝶六が大和座狂言事務所に身を置く森五六九でもある。ここで独演会をする際はどつしても落語と狂言の二本立てにした。私は副会長の春之輔師を通じて幹部に陳情することにした。ただ、「狂言をするには舞台が狭い」とは言いにくかつたので「鹿芝居（落語家が余芸で披露するお芝居）や住吉踊り（これも落語家が祭りなどで披露している）を演るてなことになつたらちよつと狭いのでは？」というところで幹部に話を通してもらつた。どうやらこれは了承してもらえたようで、総会で春之輔師より「客席をちよつとへつらなあかんよつになつた」と苦笑ながらの発表がありました。将来この小屋、狂言ではまず「大和座狂言事務所」です。そこで皆さんにお願ひがあります。この小屋の建設費用は市民の寄付に頼つて

おります。かつて大阪城が市民の寄付によつて再建されたと同じく、この小屋も市民の寄付で完成できればと思つています。それでこそ大阪の文化です。あと一息です。寄付して下さつた方のお名前を半永久的に提灯の上に残させて頂きます。・〇六・六三二五二・六二六六開設委員会まで。ところで、この定席小屋ができるにあつて何かと取沙汰されたのが「真打ち制度」導入の問題。真打ちとは元々、寄席興行で主任つまりトリを務める資格のこと。結論から申し上げるとこれは事実上の却下。東京では今もこの制度が続いているが「実力本位」か「年数優位」かなど価値観の違いから故三遊亭円生師匠や立川談志師匠らが協会を飛び出している。聞くところによると、現在も協会の若手を中心に「要らないんじゃない」という見直しの声が上がつていふ言つ。実はこれについて、私が入門して間なしの頃、師匠（故桂春蝶）に伺つたことがあります。「師匠、大阪には何で真打ち制度がないんですか？」それについての回答は実に明解でした。「要らんやろ。ええか悪いかはその時どきのお客さんが決めることや。まあ例えば、お前が出てわしが出るわな。ほいでお客さんがやで、わしよりもお前の芸の方が良かった、納得した、ちよつたらその日の真打ちはお前やちよつことなるわけや」しかしとうとうそれは実現

叶わず。肩書き、クレジツト、血筋家筋、建て前ばかりにこだわったりしない実力本位が大阪流です。いかんせん最近ではマスコミに出ている頻度をもって芸人の値打とする考えの方も世間には多いようですが。

落語をモチーフにしたテレビドラマも世間の話題になりました。ヤクザ者が落語家の修行をするという「タイガードラゴン」がそれです。「そんなアホな」というナンセンスな設定がいい。妙にリアルに描きすぎるとそれがそのまま落語家の世界だと思われてしまうからだ。今をときめくアイドル長瀬智也や岡田准一らの出演。落語家にあんな男前はいない。放映はすでに終わったがこの効果だろうか、私の落語会にも中高生という新しい客層が現れだした。しかし今は常連客が子供を連れてくるというケースに留まっている。家庭で親子が落語についてほほえましく語りあっている光景が目には浮かびます。彼らにとって「入り口遊びで出口は文化」となればいいと思うが、学校寄席がそうであるように生の落語を聞くのはおそらく私の会が初めてになるでしょう。落語に対していい印象を持つか持たないかは私次第。とても責任を感じるところであります。先日は私が講師を勤めるECC落語講座にも取材が入りました。NHKラジオ「関西ラジオワイド」という番組中、十分間ほど頂きました。その中でレポ-

ターがこんなコメントを残している。「今まで落語会が盛んになった時期を振り返ってみますと幕末・明治・大正・昭和とまず素人の落語が盛り上がりました」いやまさにその通り。芸能に関わらずスポーツの世界も同様だ。野球にしるサッカーにしるアマチュア層がまず活発である。落語講座の開設をブームの前兆と見るのは早計かも知れないが一理あると思う。私だけでも今お稽古を見させて頂いている受講生は他の教室も合わせて三〇名近く。これまでの延べでいくと百名ほどになる。自営業の方からサラリーマン、OL、主婦あるいは定年退職された方、女優、司会業の方までバラエティーに富んでいるが、皆それぞれの生活に落語のエッセンス(言葉のリズム・メロディー・イキと間・笑いの作り方考え方・人間の見方など)を役立ててくれている、と信じている。ボランティアで慰問にまわっている方もおられる。何より有り難いのは落語会の固定客となってくれたこと。落語会にも色々あって、下駄履きが似合う地域寄席、お出かけ気分のホール寄席、そして来年五月からは毎日見られる定席小屋。それぞれ味わいと役割があります。閉塞感を無くすことは古典芸能の存続にとって大事な事です。そう考えると下駄履きで行ける地域寄席の存在も大きい。このNHKの取材で「今、落語ブームと言われています

がこれをどうお考えですか？」の質問についてこんな事を言っていました。「そうでしょうか？今ブームでしょうか？ブーム、ブームでマスコミが言ってますね。これからブームにしていくということでしょうか？」当然この箇所はカットされていた。落語を応援しよう盛り上げようというお心遣いに対して失言でした。申し訳ございません。けれど「ブーム」と聞くとどうしても「情報操作」という言葉を連想してしまうのです。「ブーム」という言葉にうさん臭さを感じるのは私だけでしょうか。まあとにかく「ブーム」は「ブーム」として、要はそれをきっかけにこれからいかにその「継続」を図っていくかということ。・・・私は私なりに演るしかありません。(了)



森五六九(もりごろう)

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪スクールオブミュージック専門学校、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他ECCアーチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

「過猶不及」

金久蒼汲

能・狂言に限らず、歌舞伎、文楽、落語、新劇、オペラ、ミュージカルなど、台詞や歌で進行する芸能の最も重要な道具は、言うまでもなく人間の発する声です。肺から吐き出す息は喉にある声帯で振動し、音として響きを得、舌や唇で加工されて声となり、言葉となります。観客は演者から発せられる声の如何によつて、心地よく台詞が聞き取れたり、歌や詩に惹き込まれたりするわけですから、演者はこの「声」というものに細心の注意を払わなければなりません。

様々あります。因みに謡曲の詩の横には、気を張つて、気を込めて、沈めて、緩めて、しつとりと、引き立てて、鋭く、ズカリなど、曖昧なようであるに的確な言葉で指示が書かれています。演者はこの日本語の情感や感性を十分に理解し、さらに観客の共感を得る表現を体得しなければなりません。およそ現代の生活リズムには当てはまらない感覚に、日本語を操ることの難しさをつくづく実感してしまいます。話が横道に逸れましたが、そういった様々な表現を言葉として発する際、ある一定の吸気量で賄うというのはやはり無理と無駄が生じてしまいます。

例えば狂言ではお馴染みの「是はこの辺りに住まい致すものでござる。」という、主人の名乗りの台詞を考えてみましょう。「附子」や「口真似」など、主人は何の企みも持っていない、もしくは何かしら企んでいても、そこまで感情を剥き出しにしない演目では、この名乗りの台詞も割とざらりと切り出します。この時の吸気量を仮に基準として、次に「呼声」や「茫々頭」など、主人が太郎冠者を叱責し、立腹のやりとりで始まる不奉公物を考えてみましょう。こちらの主人は太郎冠者に対して明らかに立腹しており、名乗りの口調も低くどつしりとしたものになります。試していただければ良くお分かりになると思いますが、どつしりとした低い声を持続させようとすると、腹筋背筋に相当負担が掛かり、肺に溜めた息もすぐに無くなつてしまいます。その為この時の吸気量は先程の基準よりは当然多くなるはずで、不奉公者の頂点とも言われる「武悪」に至つては、並大抵の吸気量では賄えないでしょう。また同じ「附子」の中でも、「しばらくそれに待て。」という台詞と、「これは附子というて、向こうから吹く風に当たつてさえ滅却する程の毒じゃよつて、気をつけて番をせい。」という台詞では、文章の長さは違いますが、両方とも一息で言い切るのです。自ずと吸気量に差が生じてくるわけです。笑いにも当然同じことが言えるでしょう。小さい笑い、中くらいの笑い、大笑い、「酢薑」のように最後をめでたい大笑いで締め括る笑い止めなど、どの笑いにもそれに応じた吸気量であるはずで、

これらの例で分かるとおり、演目により、台詞の長短、リズムやテンポにより、吸気量は確実に変化しています。さらに言つと、演者は機械ではなく人間です。その日の気分や体調、相手役との掛け合いによつても様々に変わると言えます。しかし、ここで断つておきたいのは、台詞の調子というのは決して吸気量だけに左右されるものではないということです。最初にも書きましたとおり、肺から吐き出された息は身体の色々な

部位で加工され、最終的に声となつて発せられます。吸気された状態の肺とは、言わばエネルギータンクであり、台詞の調子を作り出すのは、そのタンクから吐き出す息を加工する過程であると言えるでしょう。では何故ここまで吸気量にこだわっているのかと言いますと、台詞に対して吸気量が多過ぎたり少な過ぎたりすると、台詞が崩壊する事態を招き兼ねないからです。ある程度の多少であれば、声に加工する際に調整して誤魔化しが効きますが、あまりに程度の差が激しいと、台詞の途中で息が切れてしまつたり、肺に息が余つてしまつたりといった不具合が起きてしまうのです。肺に息が余るのは、次に息を吸う手間が省けて問題ないように思えますが、実はこれが大問題なのです。これも実際に試していただけはお分かりになるとと思いますが、肺に息が余つた状態から息を継ぎ足そうとしても、ある程度は継ぎ足せても、思うように満杯にするのはなかなか難しいのです。前号にも書きましたとおり、演者は台詞のテンポを崩さないタイミングで、一瞬間で息を吸う必要があります。肺に息が余つたからといって、その余つた息を一旦全部吐き出して、そこから改めて息を吸い直しては呼吸に無駄が生じ、台詞のリズムやテンポを崩し兼ねません。また、ある台詞のために吸気した息には、その台詞の調子

や情感が込められており、その息を使い切らないまま次の台詞に移行しようとしても、前の台詞の調子や情感が残つてしまうので、次の台詞は新鮮味の無い、演者にとつても観客にとつてもなんともし持たないものになってしまいます。そうならない為にもある台詞のために吸気した息は、必ずその台詞の終わりで使い切り、また新たな気持ちで息を吸い、次の台詞へ移行しなければなりません。そしてその時吸気する息は、その台詞に合った適量のものでなければならぬというわけです。

狂言は言うまでもなく演劇です。演劇というからには明らかに人格を持った人物が登場します。演目が多いほど、登場人物が多いほど、その役柄は様々です。ある程度の基本となる役柄は存在しても、その日の気分や体調や相手役によつてその役柄も多様に変化することを考えれば、狂言は常に新たな人物が登場し、新たな人間関係を築くことで、新たな室町の一風景を描き続けているのかも知れません。それを理解し表現し続けようと思えば、演者はよほど敏感に役を演じ分ける必要があります。今回は吸気量について長々と考察してみました。その実は簡単なことなのです。その台詞を言えるだけの息を吸って、あとは加工して言葉にするだけなのです。経験を積み重ねることでできることなのです。ですが表

現の原点は声であり、声の源は間違いなく呼吸です。普段あまり深く考えないような簡単な部分にまで細心の注意を払ってこそ、演者は常に変化し続ける狂言の登場人物に敏感に新鮮に対応し、表現の幅を拓ける重要なヒントを見極めることができるのではないかと思います。



金久蒼汲(かねひさ そつきゅう)
一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後、「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉體訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二一年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。二四年インドネシア公演旅行に参加。

「一 五年七月、公演報告」

井上放雲

七月の公演報告をお伝えします。七月七日の七夕の日には、高槻の梶原ピッコロ保育園で狂言鑑賞会を行いました。対象は6歳までの園児とその保護者の方たち、それから近隣の保育所の子供たちと近所に在住のお年寄りの方々。大和座が毎年公演に訪れるようになってから早や十数年が経つ、息の長い催しです。今年の演目は最初『蟹山伏』の予定でしたが、季節柄でんでん虫が大流行していることでリクエストが届き、急遽『蝸牛』に変更されました。配役は山伏・金久蒼汲、太郎冠者・小田兆紀、主人・井上放雲、後見・安東伸元。上演に先立って、安東師匠は園児たちに狂言の謡いの演習を試みます。そんな難しいことを保育園児が？と考えるのは大人ばかりで、実際のところ子供たちは、謡を耳で聴き、それをそのまま見事に大きな声で再現することが出来ます。むしろドレミファの様な音階を基本とする西洋音楽の教育を受けてきた、あるいはそういった音楽語法に慣れ親しんでいる大人の方が、素直に聴いたままを再現することが出来ません。子供たちは謡の歌詞を一字一句理解しているわけではありませんが、七五調を基本とした美し

い古い日本語の響きを感覚的に捉えて味わい、旋律の持つつねりや緩急やリズム感を素直に楽しんでいるようでした。

そういえば以前NHKで、日本語の理解に至らない赤ん坊・乳幼児たちに「落語の語り」と「僧による声明（お経）」と「ラップ」と「狂言の語り」を、それぞれ聞かせてみたところ、「落語」「声明」「ラップ」には、子供たちは興味を示さず騒ぎ廻っているばかりだったのに対し、「狂言」の語りに興味を示し、黙って聞き耳を立てていたという実験の報告が放送されていました。狂言の口調が持つ抑揚（高低の幅広い変化、強弱のコントラスト、緩急を含むリズム感）は、子供たちの本能的な情動の部分に直接働きかけているのだと思います。まさしくそれは「音楽」の持つ本質的な性質と重なるものであり、「語りは歌うように」という格言は、見事にその本質を言い当てた至言であると言えるでしょう。古典は難しいから子供には無理、と考える人たちには、是非一度ピッコロ保育園での現場を見てもらいたいものです。むしろ古典は、少しでも小さいうちに本物を間近で見おく必要があると、私たちは考えています。

『蝸牛』上演の後、今回は「出演者と遊ぼう！」というコーナーを設けました。これがい、と主人に頼まれた太郎冠者が、間違つて山伏を蝸牛と思い込み、山伏に騙されてしまつお話です。太郎冠者はこれまで蝸牛を見たことがなかった為に、「頭が黒くて腰に貝をつけ、折々は角を出すもの」という主人から教わったキーワードを、山伏の兎巾・法螺貝・鈴掛を見てそれだと思ひこんでしまします。子供たちは太郎冠者を勤めた小田君が本当に蝸牛を見たことがないと思つたらしく、「僕知ってるで、教えてあげる！」と何度となく小田君に詰め寄ってきました。また山伏の持つ法螺貝は本当に音が出るのか、子供たちが順番に吹いてみたところ、女の子が一人だけ音を出すことに成功しました。古典を身近に。古典が絵に描いた餅であつてはならない。そんな私たちの思いは、幾ばくでも彼らの心に何らかのインパクトとなつて刻み込まれたでしょうか。

七月二十三日は、富田林の重要文化財・旧杉山家住宅にて「狂言鑑賞の夕べ」が執り行われました。この催しは富田林市立中央公民館の主催によるもので、事前に中央公民館ホールで行われた「講話と演習」と併せて、三回のシリーズの最終回となるものでした。演目は『口真似』（主/金久蒼汲、太郎/小田兆紀、客/原斗轟）と『神鳴』（医者/安東伸元、雷/金久蒼汲、地謡/小田兆紀・原斗轟・中西俊介・寺西亮

太・井上放雲)です。旧杉山家住宅のある富田林寺内町は、多くの町屋が現存する歴史的景観地区で、旧杉山家住宅は江戸時代に造り酒屋として栄えた旧家の一つであり、江戸時代中期の大規模商家の遺構として国の重要文化財に指定されている建物です。

この立派な伝統的日本家屋は、日本の古典伝統芸能を演ずるにあたって、その雰囲気という台詞の響き具合といふ非常にすばらしく、改めて教会に代表されるような西洋建築における「天に届く声(頭声発声)」と、日本の気候風土・建築に根ざした「地を這う声(地声)」の文化的相違を実感することが出来ました。ただ、開け放した窓からの自然の風と数台の扇風機しか冷房の手段がなく、目一杯照明を浴びながらの上演となった為、汗だくになりながらではありませんでしたが、反応の良いお客さんと素敵な建物に支えられ、皆気持ちよく狂言を勤める事が出来たような気がしました。

ちなみにこの日安東師匠が勤めた『神鳴』の医者は、私も幾度となく本番の舞台を踏んだ事があるお役なのですが、師匠が本番を勤めている姿を目の当たりにしたのは、今回が初めてでした。実は正直、今回これを見て非常にショックを覚えました。私もこれまで何度も台本を読み込み、型や演じ方を習い、自分なりにベストを尽くして勤めてきたつもりでしたが、そのベストが何

とも底の浅いものだったと気づかされる結果となりました。私は、医者の方の字面が持つ意味合いに文字通り一喜一憂し、その振幅を思い切り全面に出すことで演劇的なうねりを導き出そうとしていました。しかしそのことが、結果的に医者を多重人格者のような人物にしていたと思うのです。

ところが師匠は、医者がまずどの様な人物かを的確に読みとり、終始一貫してそのキャラクターを維持しながら、ドラマとしてのメリハリをも力みなく表現されていました。芸術の質を問う非常に重要な要素である「統一感」と「変化」が、絶妙なバランスで組み立てられていたわけです。具体的にどこがどう、というのは言葉では説明しにくいのですが、もしこれまでに私が勤めた『神鳴』の医者と、今回の師匠の医者を両方ご覧になった方がいらしたとすれば、明らかにその違いを感じ取って頂けたと思います。かくの如く、同じ演目でも演者が変われば狂言は大きく変わります。全く変わりなく脈々と同じものが伝承されてきた、というイメージがあるとするれば、それは間違いです。同じ演者・同じ演目でも、常にベストを尽くすという心構えがあれば、おのずとその内容は変化してゆきます。次回、私が医者を勤める時は、新たにベストを目指す中、これまでとは違った形が表出するでしょう。古典文化伝承の現場では、「今

の自分」と「先人から伝わってきた大切な知恵」が、絶えることなく壮絶な戦いを繰り広げています。果たして客席には、そんな戦いはどの様に見えているものなのでしょうか。

七月二十六日、毎年同じ日に行われている富松神社の新能は、台風の接近に伴い中止となりました。

七月二十七日、石川県立音楽堂交流ホールにて安東師匠の語りと能舞、ピアノのアルバート・ロトさんによるおなじみのコーポレーション「浦島太郎」公演。今回は石川県音楽文化振興財団の主催で行われました。これはまずオーブニングに師匠の能舞版「浦島太郎」の美しい挿絵(影絵)の映像をバックに、ロトさんがラヴェル・シューマン・リスト・ショパンなどピアノの小品の演奏を、そして師匠が物語の朗読(語り)を担当し、それぞれが交互に折り重なって進んでゆく、なかなか味わいの深いコーポレーションです。この形態での公演は今回で実に七回目を迎えており、師匠とロトさんの息もますますピッタリと合ってきた様子でありました。

公演終了後の食事会でロトさんと交わした会話が印象的だったので、紹介しておこうと思います。私は、ニューヨーク生まれニューヨーク在住のロトさんの演奏がどう

してもアメリカの演奏家らしく思えなくて、「あなたのナショナルリティーは何ですか？」と尋ねてみました。私は彼の演奏から、スラブの臭いを強く感じていましたし、安東師匠は彼のことを「そこらの日本人より余程日本人らしい」と評していました。確かに彼の祖父にあたる人はポーランド人だそうですし、彼の奥さんは雪博士・中谷宇吉郎さんの三女、つまり日本人です。彼はあつさり、「アメリカ人です。」と答えました。ナショナルリティーという言葉を「国籍」と捉えてのことでしょう。私は「民族性」という意味で問い直してみました。彼は少し考えて「それは私のアイデンティティーの問題ですね？うん、私は国際人！」（笑）と答えてくれました。「ポーランド語は話せますか？」「いいえ」「私はあなたの演奏にスラブの民族性を感じます。ポーランド人のおいしいさんからのDNAでしょうか？」とたたみかけると、「いいえ、それは勉強で獲得しました。私はロシア人の先生から学び、シヨパン・スクリヤーピン・ラフマニノフ・プロコフィエフなどスラブ系の作曲家の作品をたくさん勉強しています。」との答え。実に明快な回答でした。スラブ人より余程スラブ的な美しい音色と歌い回しを持つこのアメリカ人ピアニストは、どこの国で生まれ育ったかとか、どんな血が混じっているかなどは全く意に介さず、す

べては「勉強で獲得した」とカリリと言い切っているのです。その努力たるや、並大抵ではないでしょう。しかしそれは、私たちが日本の古典伝統芸能と関わっていくなかで、家筋がどうだの、育った環境が違うだの、何かしら目に見えない大きな壁を感じながらも、日頃から抛り所としているはずの考え方ではありませんか。まだまだ「勉強で獲得」出来ることは山ほどあるよ、と勇気を与えてもらった金沢の夜でした。

(2005.7.31)



井上放雲(いのおうえ ほううん)

兵庫県生まれ。本名・井上康夫。相愛大学音楽学部卒業。ポーランド留学、国立ワルシャワ・シヨパン音楽院修了。チェリストでもある。日本の舞台芸術理論を学ぶべく、安東伸元に師事。バルト三国・イラン公演に参加。室内楽グループ「アンサンブル「ベンジェ・ドブジェ」」の代表を務め、東西古典文化の間を日々驚嘆の喚声を発しながら往復している。小田・金久君をはじめ学生達にとっては最適の相談役。相愛大学オーケストラ講師と大阪芸術大学演奏学科オーケストラ演奏委員を勤める。

大和座狂言事務所関連

催しのお知らせ

九月

六日【火】午後五時 姫路キャスパホール

(要申込)

「能・狂言さいしょの一步」その4

「お問合せ」

姫路キャスパホール 〇七九二 八二 五八〇六

十三日【火】午後六時 千里山教室

輪読会「三輪」を読む 座長/山田師久

「お問合せ」

大和座狂言事務所 〇六 六三八四 五一六

二十日【火】〜二十二日【木】

島根大学教育学部集中講義 (安東)

二十八日【水】午前十一時 京都観世会館

「お問合せ」

浦田定期能会 一般券/三五 円

楊貴妃・鳴子遣子・殺生石ほか

「お問合せ」

京都観世会館 〇七五 七七一 六一一四

十月

八日【土】午後一時 大阪能楽会館

「大西定期能会」

巴・鳴子遣子・三輪ほか

「お問合わせ」

大阪能楽会館 ○六 六三七三 一七二六

十二日【水】午後二時

「古典芸能と出会うひととき」その三十七
新シリーズ《日本語のちから》

「男と女の言葉」

『鈍太郎』 『歌唱演習』 他

会場 千里中央『A&Hホール』

一般／一五〇〇円 会員／一二〇〇円

十六日【日】午前十時 堺能楽会館

第二十三回「羽衣能楽鑑賞会」

新作能「マクベス」ほか

「お問合わせ」

羽衣国際大学日本文化研究所

〇七二 二六五 七一 二一

描かれた各曲の作品解説、現在舞台上で使われている狂言
装束の被服学的考究(装束の構成)と着付けの技法を解説
する連続分解写真資料(装束の着付)とを付録しているた
めに、他に類を見ない出版物であると言えます。

和泉書院 ○六 六七七一 一四六七

<http://www.izumi.jp.co.jp>

編集後記

決断を迫られた時、人に何かを依頼された
時、または行動を起こす事を求められた時、
答えは二つに一つです。「やる」か「やら
ない」か。「やる」と言ってしまうには荷
が重すぎるし、「やらない」というには周
りの目が気になる時、私たちはもっともら

しい理由や言い訳を並べて、「できなかつ
た」時に逃れられる「場」を作っておきま
す。「できなかつた・・・」というのも突
き詰めていけば「やらなかつた」と同じ事
です。「やる」と決めたからには、吐いた
言葉の責任を取るために何が何でも必死に
なつて頑張らなければなりません。またで
きそうにないのなら、周りからヒンシユク
を買おうが、弱い自分が恥ずかしかろうが、
最初から「やらない」と言い切る勇気を持
たねばなりません。一番格好悪いのが最初
は「やる」と言っておいて、ギリギリになつ
て様々な理由をつけて「できない(やらな
い)」ことです。厳しい意見だと思います。
しかし実際私たちは、大なり小なり日々決
断をしなければなりません。常にこの二者
択一を迫られているのです。この「やる」
「やらない」の答えをきちんと出すために
どうすればいいのか。それはまず、健康状
態から仕事の処理能力なども含め「自分」
という存在をきちんと把握できていないと
いけません。要するにしつかりとした「自
己管理」が求められるわけです。先日、
体調をひどく崩してしまつて、一週間もの
間、仕事、約束を全てキャンセルしなけれ
ばならなくなりました。その中に、翻訳の
仕事の一つあつたのですが、調子よくやり
ますと受けておいて結局出来ず、友人に頼
んで代わりにしてもらつたという大失敗をし

てしまいました。お詫びの電話を入れなが
ら上記の事を思い返し、どれだけ反省をし
たかわかりません。これからはしつかりと
した自己管理の元、的確な返答ができるよ
うにさらに努力していく所存です。

秀

発行日 二〇〇五年 八月 八日

編者 許 秀美

発行者 安東伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

千五六五〇八四一

吹田市千里山東二丁目3の3

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

<http://homepage3.nifty.com/yamatoza>

e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp